

「老い」の視点からの地域的活動を通じた北海道的まちづくりの実践的研究

倉原 宗孝 [北海道工業大学／助教授]

背景・目的

高齢化への対応は今日の社会の緊要な課題であり、介護保険をはじめ様々な試みが模索・実践されている。ところでこうした高齢化の課題は、一方的な問題対象ではなく、「老いの価値」としての肯定的可能性も孕んでいる。高齢者独自の知識・経験・技術の社会還元は、個人と地域社会の双方の向上に向かう可能性がある。また高齢化の課題を地域社会に開かれた、かつ相互を結び合う課題として見つめることの必要性・可能性もある。本研究ではこうした「老いの視点」からみた全道の状況を把握するとともに、自らの具体的活動実践を通じて、これからの高齢社会に対応した北海道的まちづくりのあり方を考察する。

内容・方法

筆者が専門とする住まい・まちづくりの視点から、住宅・施設・住環境のハード面のみではなく、むしろソフト面を重視しつつ、ハード・ソフトの連動する高齢社会のまちづくりのあり方を探った。調査は2つの方法による。

一つは、道内の事例・状況を広く把握するために新聞記事を材料に調査・分析を行った。道内の情報について最も詳しいと思われる北海道新聞に対し、過去10年間('92～'01)における関連記事を収集・整理し分析を行った。

もう一つは、自ら地域にアクションを仕掛けつつ具体的な活動を展開する中で目的のための理論と実際を探った。活動対象は、「高齢者こびに・ばじる」(美幌町)、「高齢者下宿・菜の花」(帯広市)、「のっぽろまち育てプロジェクト」(江別市)の3つである。

いずれも上記現在の活動名を掲げた具体的動きが表れたのは半年('01調査時)ほどの新しい取り組みであるが、それまでの一連の背景や関係者の様子にも大切な内容があり、それらも含めて筆者自身、直接参画したが故に知りうる各プロセスの経験から考察する。

結果・成果

(1)新聞記事にみる老いの視点から見た地域的活動の整理・分析

北海道新聞('92～'01)に対してテーマ毎に整理してみると、「住宅・施設」(23件)、「介護・福祉」(40件)、「調査・情報」(44件)、「生涯学習・スポーツ・創作活動等」(23件)、「サービス・ボランティア」(30件)、「交流・勉強会・シンポジウム」(19件)、「その他」(12件)であった。

高齢者自身が主体となって取り組んでいるものに、ミュージカル上映、写真ばあちゃんの個展、100歳の現役美容師など、今日の高齢者の元気な様子とともに、その内容が地域のハード・ソフトに少なからず良い影響を与えていることがうか

がえる。またラジオ深夜放送のパーソナリティ、数え歌で地元の再発見、あるいは現役時代の知識・技術を活かしたシニアアドベンチャーなど、高齢者自身の知識・経験を活かした取り組みも見られる。

一方、高齢者を「対象」にしたものにもユニークな活動が見られる。「銭湯」の開放、美容院のサービス、お坊さんによる悩み相談など、既存業種が高齢者に対しても業務内容を提供していたり、あるいはパソコンやピアノなど従来大人・子どもたちの習い事であった感のあるものも高齢者を対象として展開されるなど、新しい社会の様相が生まれつつある。

(2)老いの視点からのまちづくり実践による考察

3事例の活動内容については報告書本編を参照いただき、幾つかの考察を記す。

- 新しい価値、テーマ・方法としての老い／老いの視点から独自のまちづくりの現代的テーマ・方法が生成している。例えば、便利さ追求のコンビニではなく結ぶ・繋ぐ場としてのコンビニを(ばじる)、高齢者が住むことで街中活性化にも向かう(菜の花)、高齢者にとって安全・安心な町が皆にも良い(のっぽろ)等、老いの課題が現代のまちづくりを紐解くテーマをゆるやかに生んでいる。これらは高齢者に閉じられたものではなく、世代・職種を越えて共感ともなった運動として地域コミュニティに広がりつつある。
- コミュニティ創造に活かされる知恵や技術の還元／高齢者の技術・知恵が各活動を活性化している。懐かしい食べ物、しめ縄や縫い物等の技術、あるいは健康の為の知識・経験など、集まる者に懐かしさだけでなく新鮮な興味を持って喜ばれている。同時にそのことが還元者である高齢者自身を豊かにしている。また、活動に対する高齢者自身の共感・期待から、人的・経済的支援が提供されている面もある。その中で暮らしの細部にも心を配る世代を越えたコミュニティが生成している。また、歴史・記憶を語り話し合う中で地域のアイデンティティや新たなまちづくりのテーマも生成しつつある。
- 独自のリズム・場を醸成する／老いの視点から発する活動や場のしつらえが、地域の個性としての空間やリズムを醸成しつつある。火を囲みながら地場産品や手工芸に目を遊ばせつつ緩やかな語らいの時間が流れる「ばじる」、縫い物をしつつ世間話からまちづくりまで話を弾ませる「のっぽろ」等、その地域らしいコミュニティ育成の拠点としての集いと情報発信の場が醸成しつつある。

今後の展望

「老い」の視点を活かした新しい活動・空間整備、地域や社会づくりの方向が示唆された。また、高齢者の課題を切り口に多業種・多世代で関わっていくことが、幅広い主体の暮らし・まちづくりに寄与する方向・可能性が見られる。

今後の研究展開として、一つは、今回得られた新聞記事に見る情報分析の延長としてより広く深い調査分析に向かいたい。一方自らの参画により進めている今回取り上げた3つのプロジェクトは現在進行中である。これについてもその段階毎の調査分析の必要がある。今後さらなる活動展開による先進事例の開拓とともに、その成果の社会還元に向かう研究展開を目指す。